

第2回 ユースエコクラブ シンポジウム

(Captains of Environment)

環境問題を話し合い、日本の環境リーダーを目指そう
— 大学生リーダーとともに考えよう —

実施報告書



開催日時：平成25年3月23日(土)から24日(日)

開催場所：犬山国際ユースホテル

主催：NPO エコバンクあいち

共催：(財) 日本環境協会内 こどもエコクラブ全国事務局

後援：愛知県

保険：年間を通じ、以下の団体保険に加入

引受会社 富士火災海上保険株式会社

契約内容	対人賠償	1事故あたり	限度額	10億円
		1人あたり	限度額	3億円
	財物賠償	1事故あたり	限度額	3億円

当事業期間中の保険契約内容

国内旅行傷害保険	死亡・後遺障害	1人あたり	1千万円
	入院保険金		4500円
	通院保険金		3000円
	個人賠償		5千万円

募集の経緯：

- 4月 助成金の内定を受け、準備を開始。
- 9月 後援申請その他の準備を終える。
日本環境協会のご協力を得て、参加者募集の書類を発送する。
- 1月 参加者を決定。テーマごとのメーリングリストによる話し合いを開始。
- 3月 シンポジウム開催

参加者：

東京都、愛知県、長野県、京都府、福岡県、沖縄県、カナダから
合計 16名(参加形態は当日会場参加、スカイプ参加、メーリングリスト参加、LINE参加など多様)
この他、有識者 2名、スタッフ 4名、主催者 3名

★ この報告書は、当会ホームページでご覧いただけます。

活動内容

3月22日(金)

- 9:00 リーダーは事前準備のため会場に集合、顔合わせ。
リーダー全員でシンポジウム全体について、また当日の議論の進め方について確認。
その後各テーマの話合いを開始。
英日の環境用語集に収録する日本語の環境用語選びを開始。
- 12:00 昼食・休憩。
- 13:00 話合いを再開。
「街づくり」グループは沖縄県の参加者とスカイプによる議論を行った。
また、カナダとの通信状態を確認。
- 18:30 夕食・休憩。
- 19:30 各自話し合いを継続する。
↓

3月23日(土)

- 9:00 参加者、リーダー、有識者、サポーター、スタッフ（順不同）が会場に集合。自己紹介。
リーダーは話合いを開始。前日からの英日の環境用語集の作成作業を継続。
- 12:30 昼食、休憩。
- 13:30 話し合い、環境用語集作成作業を再開。
- 17:00 酸性雨実験
講師が準備してきた器材を使って、酸性雨になるのを確認する。
酸性雨ができる過程の説明と共に、実験を行う時には、火の扱い、手袋の使用など十分に安全に注意することも学ぶ。



- 18:00 夕食、休憩。
- 19:00 話し合いを再開、継続。
↓

3月24日(日)

- 8:00 朝食・休憩。
- 8:30 発表の準備。
「生物多様性」グループはカナダのグループとスカイプで交信。
この時点までに話し合った内容について質問し、意見を求める。
カナダのグループの活動の現状を説明してもらう。



- 9:30 有村君が到着し、「エネルギー」グループに合流する。
各グループは、発表資料の作成を進める。
- 12:00 昼食・休憩。

13:10 シンポジウム開始。

「エネルギーを考える」グループの発表

エネルギーといえば一般に電力に結び付けられることが多いが、そもそもエネルギーとは何かということ把握しておかなくてはならない。私たちは、自然界から得られる1次エネルギー(供給)を使いやすいように加工・転換し、最終エネルギーを消費して製品を作ったり、人や物を運搬したり、冷暖房・給湯・照明など生活を快適で便利にしている(需要)。このほか、製品の製造から廃棄までにかかる間接エネルギーも考える必要がある。

またエネルギーの問題は、供給、加工・転換、需要の各段階にいくつかあり、複雑である。

現在1次エネルギーの中で最も依存度が高いのは石油である。これは、石油のエネルギー密度が高く液体のため使い勝手が良いこと、石炭より環境負荷が低いと考えられる。石油のみならず化石資源には限界があり、このまま消費が拡大していくと資源が枯渇してしまう。そのため代替エネルギーが必要であり、在来型・非在来型・原子力・再生可能エネルギーなどをうまく組み合わせて、補うことが必要である。

供給における課題はエネルギー源の開発など、加工・転換における課題は加工・転換時におけるロスの軽減、需要における課題はエネルギーの有効利用と限りある供給に需要を近づける努力である。

Q&A

Q: 石油を例に、見通し可採年数と生産量のピーク時のシナリオの時期をどう考えればよいか。

A: あくまで見通しであり、年数は変動するので目安と考える。

Q: 需要と供給をつりあわせるために考えられることは何か。

A: 電力の場合、

- ・火力発電の排熱を利用するなどの有効活用
- ・ロスの軽減のため、インフラを整備したり、効率的なシステムへ変換。
- ・風力・太陽光など複数の方法を積極的に導入などが考えられる。

講評

まず、シンポジウムで発表することの目的を意識して発表することを心がけるとよい。参加者の「学ぼう。知りたい」を充足する知識や情報の提供をすることが大切。

発表時間内に終わることを意識しよう。

テーマの、全体の内の1要素だけを取り上げて全体として論じないようにすることに気を付ける。

補足

電力の場合、現在自給的なエネルギー生産を行い、地域用を行っているところがある。

石油依存の中で効率を上げるため、蒸気タービンとガスタービンの複合発電の採用が始まっている。



13:52 休憩

13:58 「生物多様性」グループの発表

多様性には、「種の多様性」「生態系の多様性」「遺伝的多様性」がある。我々が生物と共存していくことに重点を置いて考える。今回は、河川の上流から中流までを考え、里山も含む。

「遺伝的多様性」の問題

自然界に無計画に生物を放つ行為のため、本来いる個体群と入ってきた個体群の交配が進み、地域の個体群の遺伝的多様性が損なわれる。→地域の環境や生息する種を考慮するなど、配慮が必要。

「生態系の多様性」の問題

これまで人間の管理で維持されてきた里地里山が、現在では人口減少や継承者の減少のため、また燃料や用材としての木材の利用の減少などの理由で管理が行き届かなくなっている。そのため生物多様性の低下をもたらしている。

また上流域での山林の管理不足による単一林への移行や、中流域での護岸工事の影響で、水生生物のすみかの減少が起こっている。この問題解決への提案として、護岸工事を日本の伝統的な工事方法や自然と共生できる方法を取り入れることが考えられている。

今後は中流から下流域について考え、数年かけて様々な生物に関

わる問題を含む生物多様性について議論を進めていく。その際、「考え方の多様性」「地域の多様性」「文化の多様性」も考慮に入れていく。

講評

テーマに関して資料2ページ目に3つのポイントを挙げたので、その後の説明は挙げた順に進めていくのがわかりやすい。

その際、関連した説明を導入して進めていくことが重要。→質問を封じるための説明の進め方。

背景知識を蓄え、質問された場合に答えられるよう事例を考えておくことが大切。

「種の多様性」に関連して・・・現在多くの農作物の収穫は単年度としており、次年度は新たに種を購入して育てる。しかし、収穫の際に次年度用の種を残し、伝統的な種を継承していくことも大切。

「最後に」で、「文化の多様性」に着目した点が素晴らしい。



14:27 「産官学の協働」グループの発表

産・官・学の3者はそれぞれの特徴を生かし、足りない部分を補って、単独では進めることが困難と思われることに取り組むことができる。協働が目的ではなく、同じ目的を達するために協働するとの姿勢が必要である。

産・官・学の特徴をいくつか挙げてみたが、まだ十分に特徴をつかみ切れていないと考えている。

どのような協働の形が考えられるか、ここでは2つの施策について説明する。一つは、企業の資金力と行政の権限・信頼性、学術機関の専門知識を生かした「公益性の高い法人の設立」。

もう一つは、企業システムと行政のスクリーニング能力ないしは、情報収集能力、学術機関の専門知識や政策提言を生かした「積極的な商業化」。それぞれ、「日本環境技術協会」「北九州環境ビジネス推進会」の事例がある。

その他には、企業のチャンネルや行政を使った大規模な社会的実験や行政の単年度予算の限界を補完する基金の設立なども考えられる。

講評

誤解や不明瞭さを避けるために、適切な言葉の使用、平易な言葉の使用を心がけるとよい。

補足

現在、各地方単位で企業が資金供与し、事業を行う人を探してマッチングさせる「パートナーシッププラザ」というコーディネートが行われている。



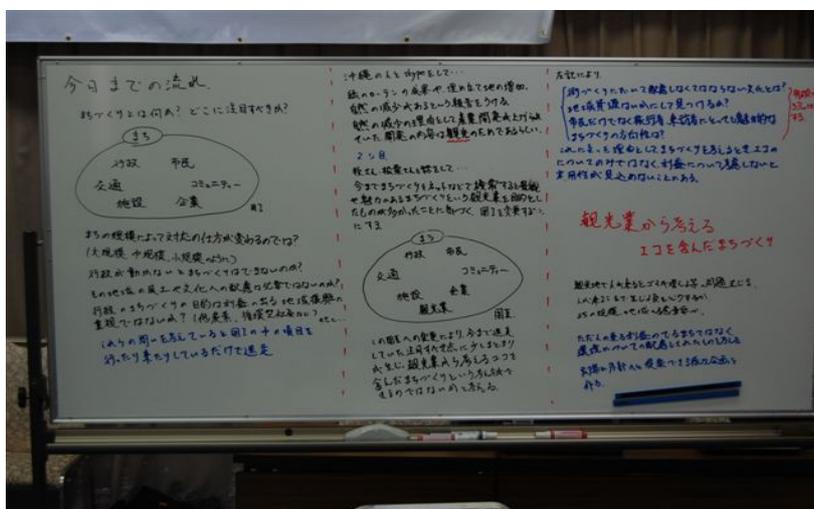
15:05 「まちづくり」グループの発表

まちづくりについてどの切り口から考えるのか、先入観にとらわれていると話し合いに広がりがなくなってしまうのではないかと、専門性が必要な要素が含まれているのではないかなどいろいろ考えた結果、今回の目標は……まちづくりとは何かを考える。何に焦点を置くかを定める。今後話す大まかな道筋を見つけ、定める…に決定。まちづくりを考える場合、そもそもまちとは何なのか、まちの規模の影響、行政の果たす役割、地域の文化への配慮、重視すべきことなど考える要素が数多くあるので、どこかに焦点を絞って進めることにした。これまでのまちづくりの活動には観光を焦点にしたものが多かったので、

観光問題を含めた観光業からまちづくりを考えることにした。

講評

テーマが大きすぎると感じる場合、いくつかの構成要素に分け、さらにその中の一つまたはいくつかの要素に焦点を絞ることで、話し合いを進めやすくするのは一つの方法である。取り上げるのは小さな要素であっても、多様な知識を蓄えておくことは必要である。



15:30 シンポジウム終了

<今後の課題・方向性>

・今回、シンポジウムの開催数か月前から、リーダー達は環境専門家より指導を受け、膨大な資料を読み、それぞれのテーマについて、議論の進め方について、シンポジウム全体のあり方についてなどを話し合ってきた。スカイプを使ってのテレビ会議やメーリングリストで、大変有意義な話し合いを進めることができた。カナダのグ

ループとの話し合いも、当日のみでは時間が限られる(時差があるため)ので、今後はメーリングリストを使って事前から参加してもらえるよう了承を得た。

・次年度は公募時期を早め、メーリングリストとスカイプなどを使用した事前の話し合いに多くの時間を取れるようにし、より成果のあがるように配慮する。